

「満洲国」の民族誌

—『アジア・太平洋地域民族誌選集 第5回』の編集にかかわって—

中生 勝美

宮本常一は、戦前、柳田国男の勧めで民俗学を志して上京したが、柳田から当時民俗研究が最も盛んであると言われた「満洲国」に懲懲された。しかし、渋沢敬三から、満洲へ渡る前に日本を見ておくように忠告され、結局、宮本は「満洲国」へ渡らず、日本の専門家になった。この逸話を『季刊人類学』の「宮本常一」の紹介で読んだとき、当時、日本国内よりも盛んだったといわれる満洲の民族学・民俗学なるものが、戦後はほとんど忘却され、民族学、あるいは文化人類学の研究史から消滅していることに疑問を持った。

たしかに、満洲の民族学・民俗学とジャンルわけされる民族誌は、「満洲国」の各部局、満鉄調査部、満洲事情案内所、興亜院、東亜研究所など、さまざまな機関から大量に出版されている。しかし、こうした民族誌は、かららぬしも系統立てて、組織化された研究とは言いがたく、それぞれの機関が、個別の必要性から独自に出版しているのである。換言すれば、それだけ民族誌作成の職場がたくさんあったともいえる。複数の機関から相互関連なく作成される民族誌を、あるいは結びつけ、総合的な民族研究を目指そうとして組織化されたのが「満洲民族学会」であった。これも1942年に発足したので、「満洲国」および、「蒙疆」とよばれた内陸アジアの民族誌作成には、ほとんど影響がなかったといえる。

筆者は、今まで植民地人類学というテーマを掲げて、戦前の民族学・人類学・民俗学の歴史を記述してきた。満洲に関しても、「植民地主義と日本民族学」『中国－社会と文化』8号(1993),「植民地の民族学：満州民族学会の活動」『へるめす』52号(1994年), “Japanese colonial policy and anthropology in Manchuria” in Jan Bremen & Shimizu Akitoshi,ed. *Colonial anthropology in Asia and Oceania*, Cruzon (1999)などを発表してきた。欧米では、注目される研究分野が出現すると、それをさらに広めるために、その分野で主な論文を集めたリーディングスが編纂され、その分野の研究の紹介と同時に、研究史の蓄積をコンパクトにまとめた本が出版されることが多い。このひそみに倣い、現在は忘れ去られてしまった「満洲国」の民族誌を、資料集として復刻することで、入手しやすくする方法はないものかと思案していた。

ちょうど、東京大学の山下晋司氏から、クレス出版という出版社が、『ア

ジア・太平洋地域民族誌選集』という形で、昔の民族誌を復刻出帆する企画の協力依頼を打診してきた。そこで、東南アジアと中国大陆の民族誌を復刻する出版計画を相談した。今回で完結した『アジア・太平洋地域民族誌選集』は、全部で5回のシリーズ、全36巻の大部なものになった。当初の計画では、復刻の対象地域として台湾・朝鮮も含まれていたが、特に台湾では近年、戦前の民族誌の復刻が非常に盛んであり、また韓国でも朝鮮総督府の調査資料は復刻されているので、編集委員で候補に上げた主要な民族誌はほとんどが復刻されていた。そこで1回から3回のシリーズは東南アジアが中心となって復刻することにした。第4回は『蒙古地誌』3巻を6分冊にして復刻したが、第5回を満洲・内陸アジアのテーマで復刻した。次は、第5回の復刻した資料の書名である。

満洲民族学会会報

満洲国道院紅卍会の概要

満洲史観

満洲国の縁族複合状態

満洲民俗考

満蒙民族誌

満洲宗教誌

満洲風土記 上・中

綏遠に於ける蒙古民族

満洲ニ於ケル額倫春族ノ研究

ソロン族の社会

中支に於ける民間信仰の実状

支那に於ける新興宗教

北京回民小資本貸借に就いて

西北羊毛貿易と回教徒の役割

満洲国の回教調査資料

北支那回教事情

これらの民族誌は、日本での所蔵が限られているか、あるいは所蔵されていないものを厳選して候補に上げた。「満洲国」で作成された民族誌は、非常に大量にある。しかし、その中から、資料的に、また研究史的に重要なものを選んで復刻したのであるが、著作権の関係などで候補から外れたものもいくつかある。では、次にその内容について特徴的な民族誌について、若干のコメントをしておこう。

この中で『満洲民族学会会報』は、すべてをそろって所蔵している図書館はなく、複数の図書館を探してやつとそろえることができた雑誌である。満洲民族学会は、拙稿にもあるように 1942 年になって設立されたが、それ以前の「満洲国」内の民族誌作成の機関を結びつける役割を期待されており、学会の設立以前に作成された民族誌も、ある程度関連が見られるので、最初にあげておいた。黒田源次の『満洲史観』と小竹一郎の『満洲国紅卍字会の概況』は、この満洲民族学会の特定研究として出版されたものとして選集に入れた。実は、山本実の『満洲国内在住諸人種、諸民族の指紋に関する研究』が、特定研究として出版されていたのだが、この本は日本国内で所蔵している図書館はなく、わずかに中国東北部の数箇所の図書館での所蔵が確認できているが、現在のところ、現物を見たことはない。指紋の問題は、「満洲国」が指紋研究で、当時最も進んでいたといわれ、形質人類学の研究テーマとして、当時は大変注目されていた分野であるので、いずれは閲覧してみたいと願っている資料のひとつである。

「満洲国」の少数民族で、もっとも「原始的」というイメージが強かったオロチヨン族は、ソ連国境付近の大興安嶺と小興安嶺に居住していた採取狩猟民族である。この民族は、当時の人口統計で、わずか 1500 人程度の人数であるにもかかわらず、非常に多くの民族誌が作成されている。その特徴として、専門の研究者、例えば秋葉隆、泉靖一、今西錦司など著名な人類学者・博物学者などばかりでなく、軍人も調査報告書を作成しているのが、非常に大きな特徴であった。その軍人の報告書にも秋葉隆の研究の引用があり、また秋葉隆も満洲国軍の協力で現地調査ができたという謝辞もあり、双方の関係が密接だったことをうかがわせる。この選集で復刻した『満洲ニ於ケル額倫春族ノ研究』は、まさに「満洲国」の治安部参謀司が調査したものである。ある研究会で、軍人の民族誌の実例としてこの本を提示したところ、ある人類学者は、この報告書をめくりながら「偏見と軽蔑のまなざしを持つ調査者でも民族誌は作成できるものだ」という感想を漏らした。当時は作戦の必要性としての民族誌データを集めており、まさに、現在の感覚で研究者の民族誌作成の動機とは根本的に異なることを指摘する意見で、現在的見地で歴史を見る危うさを想起させた。

また『綏遠に於ける蒙古民族』は翻訳であるが、その原本となった『綏遠省通誌』は、1937 年の綏遠作戦で日本軍がこの原稿を奪取して、「蒙古」の部分だけを抄訳して出版したものである。日本軍は盧溝橋事変以降、内陸アジアへの侵攻を進め、1939 年には第二満洲国とも呼ばれた「蒙疆連合自治政府」というモンゴル人の傀儡政権を設立させた。そのときの重要な工作として、草原地帯に入植してくる漢民族と、そこで放牧をするモンゴル人との

民族対立を対処する必要性があり、現地の事情を把握する必要があった。蒙疆政府は、牧草地の利用と、耕作化に向けての基礎調査をしていたが、本書は、そのための基礎資料として利用するために翻訳されたものだと考えられる。この本の特色は、単なる地方史として、過去の史料をつなぎ合わせるのではなく、「采訪録」という実地調査をした記録を多用している点であり、かつ翻訳の時点で、不明な点は翻訳者も実地調査をしているところが、従来の「地方誌」とは異なる特徴がある。戦時中に、蒙疆政府の首都、張家口に設立された西北研究所の次長をしていた石田英一郎も、本書が単なる翻訳ではない民族誌として高く評価をしている。

最後に、宗教関係の民族誌として、民族政策と密接なつながりのあった内陸アジアのイスラムに関する報告書を採録した。以前、板垣雄三東京大学名誉教授から、戦前のイスラム研究の水準が高いという話を伺ったことがある。日本のイスラム研究は、戦前の研究レベルが高く、1980年代になって、日本からイスラム圏へ直接留学した学生が研究を始めるようになって、やっと戦前の水準を超えるようになったと言わされたことが印象に残っている。戦前のイスラム研究は、ユネスコ東アジア文化研究センター編『日本における中央アジア関係研究目録』(ユネスコ東アジア文化研究センター、一九八八年)，そしてこれを基礎に新しい文献を絶えず増補して、インターネット上で検索できるホームページで研究論文を調べることができる(<http://www.toyo-bunko.or.jp/OnlineSerch/CentralAsia.html>)。

内陸アジア研究が膨大な量に及び、その中に、宗教や歴史研究だけでなく、実態調査をした民族誌が少なからずある。どうして15年戦争期に、これだけのイスラム研究が蓄積されたのかといえば、対ソ連の南下防衛のために傀儡政権の「満洲国」を作った後に、第二満洲国と呼ばれた蒙疆政権を蒙古で作り、さらに第三満洲国にすべく、甘肅・寧夏、さらに新疆自治区に及ぶ地域に親日傀儡政権を樹立して「対ソ包囲網」を確立するために、内陸アジアのイスラム工作が重要視され、そのための調査研究体制が整備されていった。戦後、中国文学や東洋史の研究者となった著名な研究者たちが、戦時中は軒並み回教研究をしていたのは、そうした事情があったのである。

「満洲国」建国以降、イスラム関係の団体が陸續と設立されている。たとえば1932年に満洲回教協進会、日本イスラム文化協会、アラビア・トルコ学会が相次いで設立され、1933年にイスラム学会、1934年に陸軍が外輪団体として蒙古善隣協会が設立され、1936年に日本回教文化協会、1938年に回教圏考究所、大日本回教協会が設立された。この年、中国で関東軍の下部組織として中国回教総聯合会が組織された。この団体が、華北・内蒙の回教徒の状況を極めて詳細に把握しており、その報告書の一部を、この選集に

採録した。

これらの資料は、膨大な民族誌資料の一部に過ぎない。今回の選集に採録できなかつた民族誌の中に、池尻登の『達斡爾族』（満洲事情案内所、1943年）がある。この本の著者は、民族学など、特別な教育や訓練をうけていなければ、その内容はきわめて素人離れした記述の民族誌である。1943年に「満洲国」の首都新京（現在の長春）で出版されたこの本の著者は、満洲生まれで満洲育ちとあり、官吏として異民族工作の仕事に従事していた。大興安嶺での厳しい生活で、同僚の日本人2人を病氣で失い、1人は盜賊に拉致されて虐殺された。この厳しい環境の中で、9年間のダフル族とともに暮らした経験を、この民族誌として残している。歴史や経済の概況は、当時の「満洲国」で盛んだった満洲史の出版物を参照し、民俗や宗教の記述は、直接引用はないものの、巻末の参考文献を見ると、当時の満洲民族学の著作や政府の刊行物を参考にしていることがわかる。そして生活用品や住居はスケッチを用いた説明などは、非常に分かりやすい構成になっている。この民族誌を見る限り、「満洲が民族学、民俗学が盛んだ」と言わされた多くの成果を吸収した「素人」の民族誌の中では、もっとも良くできた報告書の一つである。

この時代の民族誌は、異民族の調査研究というものもあるけれども、植民地、あるいは傀儡政権で仕事をしていた日本人の生活記録として民族誌を作成するということもあったのである。民族誌の作成を、東洋学とか人類学というような「学問」的研鑽を積んだ「研究者」に限定していくには、戦前の「満洲国」や内陸アジアで、どうしてこれだけ大量の民族誌が作成されていたのか理解できない。当時の戦略や「大陸経営」の政策を勘案しながら、またそこからはずれた大陸での生活者の視点で生まれた記録の一部として民族誌を捉えなければ、時代の産物としての満洲民族学は見えてこないのでないだろうか。

かつてイギリスの人類学の理論的担い手が、ニュージーランド生まれのファースや、南アフリカ生まれのフォーテスだった。彼らは、生まれ故郷をフィールドワークしながら、ロンドンで人類学的トレーニングを受け、理論を洗練させていった。日本的人類学も、植民地の大学で活躍した人類学者として泉靖一や馬淵東一の名前が挙げられるが、「満洲国」・内陸アジアの研究者も、戦後の日本の民族学・人類学の発展に大きな貢献をしている。民族学が最も進んでいたといわれた「満洲国」での研究は、潜在化しながらも、現在の研究のルーツとなっているのだろう。戦前の民族誌の作成過程と、当時の歴史的背景について、今後、具体的な資料に基づいて、学際的、かつ国際的な検討をおこなうためにも、まずこうした基本的な資料を復刻することが共

通の土台を作るうえでも有用ではないかと思い、今回の企画を進めた。

多くの満洲関係の資料の中で、「在満 10 年を超えて、すこし満洲のことが理解できてきた」という趣旨の前書きを見て、自らの立場と比較してみると、定職についた後は、基本的に大学が休暇に入る期間でなければ現地に行くことはできず、はるか昔の中国留学経験を短期間の中国滞在で微修正しながら研究を続ける身にとって、現地理解の深度はおのずと差が出てくるのも無理はないため息が出てしまう。また「出征前に生きた証として原稿を脱稿した」というあとがきを見たときには、その文章の凄みに脱帽してしまった。こうした先人達の遺稿をもう一度読み返し、立場の異なる中国語文献との比較をおこなったり、現地調査をしたりして、現代的な視点から批判と評価を加えることが、この企画で復刻した資料に限らず、数多くの「満洲国」に関する遺産を次の世代が引き継ぐことになるのではないだろうか。

(なかお かつみ：大阪市立大学法文学部助教授)